札幌大学総合論叢　第二十七号（二〇〇九年三月）

〈論文〉

村上春樹『ねじまき鳥クロニクル』論

――火曜日の女から金曜日の女へ――

山﨑　眞紀子

はじめに

私は今まで、現代文学作家の村上春樹が小説内で描く女性表象に関心を寄せてきた。大きな見取り図で表現すれば、彼の小説に登場する女性は、男性主人公の自己確立を助けるべく元気づけ、励まし、ときに難題を押し付けて一つの大きな壁を超えさせようとする。また一方で、難題を潜り抜けるために知恵を貸したり、力を与えたりすることもある。男性主人公を置き去りにしたまま、死の世界や異界へと旅立つこともある。そのヴァリエーションは非常に豊かであり、複雑でもある。数多くの作品を読むに従って私は、村上春樹作品は女性登場人物を通して何を働きかけようとしているのかが非常に気になってきたのである。

村上春樹は、自作『ねじまき鳥クロニクル』（注1）の第1部と第2部を収録した『村上春樹全作品1990～2000④　ねじまき鳥クロニクル1』（講談社、03年5月）の巻末解題で以下のように述べている。

『ねじまき鳥クロニクル』は妻が突然行方不明になり、主人公である夫が彼女の行方を捜索する物語である。僕の小説では多くの場合、「なくなった何かを探し求める」というのは、ひとつの重要なモチーフになっている。たとえば『羊をめぐる冒険』においては、主人公は星のしるしのついた特別な羊と、いなくなった友人を捜し求める。『世界の終りとハードボイルド・ワンダーランド』においては、主人公は失われた少女を求めて、影のない街へと入っていく。しかし『ねじまき鳥クロニクル』がほかの先行する作品と異なっているのは、主人公は自ら積極的にそれを探すことを希求し、そのために闘いもするということだ。それまでの僕の小説の主人公にはどちらかというと、非積極的に物事の流れに「巻き込まれる」という要素が強かったのだが、『ねじまき鳥クロニクル』の主人公である岡田亨には、「何があっても妻を探しだす」という一貫した強い意志がある。決して世間的にみれば強い人間ではないのだが、いったん何かを心に決めると、あとに引かないところがある。（略）妻を探すという作業は、誰かのための作業ではなく、自分自身のための作業なのだということが、主人公にはちゃんとわかっているからだ。

そのような積極性、あるいは闘争性は、この作品の全編を通して流れていると思う。というか、そのようなはっきりとした前向きの意志をなくしては、これだけの長丁場の物語を乗り切ることは不可能だった。そういう意味ではこの『ねじまき鳥クロニクル』という作品は僕の作家としてのキャリアの中では――特に第3部を得てからは（この経緯についてはあとで述べることになるが）――ひとつの転換点として機能していると思う。つまりこの作品を書く前と、この作品を書いたあとでは、僕の作家としてのあり方がずいぶん違っているということだ。（略）今の時点から振り返ってみると、『ねじまき鳥クロニクル』以降の僕の作品が、都会的なソフィスティケーションや軽みを徐々に失う方向に向かっていったのは確かだ。そのかわり「何かと関わり合っていく」という意志のようなものが、登場人物の中に少しずつ見受けられるようになっていく。（P557～558）※傍点は原文

この長い引用文の中で特に注目したいのは、『ねじまき鳥クロニクル』第3部の完成をもって、村上作品は転換期を迎えたということである。そしてもう一点、村上は「主人公」を岡田亨とし、「何があっても妻を探しだす」という一貫した強い意志のもとで物語が動き、展開していくことを表明していることである。また、本作品は短編小説『ねじまき鳥と火曜日の女たち』（「新潮」86年1月号）が芽を出し、長編小説へと発展したことも同解題で村上春樹は述べている（注2）。この短編小説では、妻の言葉を受け止めかねたまま物語は終わっており、男性主人公が何かへ向かおうとする「意志」の萌芽は見えていない。声も立てずに泣き続けている妻を目の前にして、鳴り続けている電話のベルを二十回まで数え、最後には数えるのをやめるところで物語は終わっている。さらに女性登場人物が物語を動かしていく短編小説『加納クレタ』（『TVピープル』文芸春秋、90年1月）をも視野に入れ、この主人公たちが『ねじまき鳥クロニクル』に編入されたとすれば、岡田亨は彼女たちの力を得て、それまでの受け身的に巻き込まれるスタンスから離脱し、問題を受けて立ち、意志を受け継いで積極的に「闘争」していく勇者としてのビルディングスロマンの主人公としても受け止められる。

しかしながら本論で考察していくのは、主人公・岡田亨の成長譚の分析ではない。前述したように、本論は女性表象の分析に主眼がある。主人公を助けることに費やされる受け身的なこれまでの女性像から、主人公とともに「何かと関わり合っていく」という意志を、自己のエンパワーメントのために振り向け、自らの力で解決しようとし、責任もきちんと引き受ける岡田久美子の、勇者としての姿を抽出

する試みを行いたいのである。もしこの試みが可能であれば、岡田久美子の誕生は村上春樹作品の中で、確かに大きな転換点を持つことであろう。

Ⅰ　岡田久美子が働きかけた時間

『ねじまき鳥クロニクル』は、「新潮」1992年10月号に新連載と銘打たれ、発表を開始した。初出誌の冒頭は、「電話がかかってきたとき、僕は台所でスパゲティーをゆでているところだった。」とある。単行本（94年4月、新潮社）や文庫本（97年10月、新潮文庫）ないしは『村上春樹全作品1990～2000④　ねじまき鳥クロニクル1』（03年5月20日、講談社）では「台所でスパゲティーをゆでているときに、電話がかかってきた。」と書き直されている。意味内容は、さして変わらない。だが、ニュアンスからすれば多少の違いは感じられるだろう。前者は「電話がかかってきた」を先に置き、さらに助詞の「に」が置かれていない分、勢いがあり「電話がかかってきた」出来事性が重視されるのではないだろうか。すでに発表されてから十数年以上を経過したいま、この作品が第3部にまでわたる大長編であり、最後まで読んだ読者は、この電話の声が久美子であることがわかっている。だが、「新潮」で連載小説を新しく読み始めた同時代の読者にとっては、この不思議な電話が久美子であることは当然知らされていない（注3）。したがって、そのかかってきた電話そのものに注目を向けさせなければならない。単なる勧誘やいたずら電話ではないことを際立たせなければならないのである。

書き換えられた文では、電話がかかってきたときがいつなのかに焦点があてられている。朝十時半という、昼食にはまだ早い時間にスパゲティーをゆでていられるのは、「僕」が世の中の時間に合わせることなく、自らの空腹感に従って自分で時間を組み立てられる立場（失業中）にいるからであるが、そのように時間の制度の箍が外れた時に、その電話がかかってきたことが強調される。電話はそのような時間を持つことが可能となった亨に向けられてメッセージが発せられるのである。亨はそれまで勤務していた法律事務所にいた時は、短いランチタイムに混雑したレストランに並んで昼食をとらされていたことを回想している。一斉に昼食を摂らなければ成立しない仕事に就いている立場では、時間は自分の自由な采配のもとにはない。つまりここでは亨が自由時間（ランチタイムでもない時間にスパゲテ

ィーをゆでていられること）をもつ存在であることが、書き換えによってクローズアップされるのだ。自由な時間はこの物語において、必要不可欠なものである。亨は仕事を辞めておよそ一週間後に、次のような問いを自らに発している（1部第2章冒頭）。

ひとりの人間が、他のひとりの人間について十全に理解するというのは果たして可能なことなのだろうか。つまり、誰かのことを知ろうと長い時間をかけて、真剣に努力をかさねて、その結果我々はその相手の本質にどの程度まで近づくことができるのだろうか。我々は我々がよく知っていると思い込んでいる相手について、本当に何か大事なことを知っているのだろうか。

この疑問を抱くきっかけとなったのは、失業中である亨が家事を引き受けていて、買い物を済ませ夕食の準備をしながら出版社に勤務する久美子の帰宅を迎えたときのことである。久美子の帰宅はいつもより遅く、九時過ぎであった。久美子は片付かない仕事があったと述べ、ぐったりとして目が赤く血走っている。「疲れていらいらしていた」、生理が近いために「イライラしてる」せいだと久美子は後に述べるが、帰宅早々に亨が日中に買っておいた青いティッシュペーパーと柄のついたトイレットペーパーを、久美子は「嫌い」なものを買ったと立腹し、さらに夕食として準備されていた牛肉とピーマンを一緒に炒めたものも「大嫌い」と怒る。怒りはさらに発展し、「あなたは私と一緒に暮らしていても、本当は私のことなんかほとんど気にとめてもいなかったんじゃないの？　あなたは自分のことだけを考えて生きていたのよ、きっと」と亨を責めるのだ。

亨は六年間も一緒に暮らしていても知ることのなかった妻・久美子の好みに、初めて直面し、なんとかその場は宥めて大きな夫婦喧嘩の危機は回避したが、その夜、寝室で隣に寝ている久美子の横で、改めて「この女についていったい何を知っているのだろう」と自問している。このことは「まるで喉にひっかかった魚の小骨のように」居心地を悪くさせ、この日目にした久美子の耳に魚の形をした金の、それまで見たことのないイヤリングが付けられていたことと重ねて、「その奥には、僕のまだ知らないクミコだけの世界が広がっているのかもしれない。それは僕に真っ暗な巨大な部屋を想像させた」との思いに亨は至る。

（九五）

（九六）

一般的に言って、妻がイライラをぶつけ、夫がそれを受けることは、その逆もまた夫婦間であればそう珍しいことではないだろう。久美子の言うとおり、好き嫌いには理屈はない。説明不可能な感情の問題であるからだ。その人をその人たらしめている感情は、私的領域、つまり多くは夫婦間や家族間において発現される。そういう場に慣れているはずの夫であれば、妻の好み云々に対する異議申し立てを、さして真剣に受け止めず受け流してしまいがちであるが、この日、亨は改めて妻・久美子の「僕のまだ知らないクミコだけの世界」があることを想像し、疑問を覚えるようになる。

僕はいつかその全貌を知ることができるようになるのだろうか？　あるいは僕は彼女のことを最後までよく知らないまま年老いて、そして死んでいくのだろうか？　もしそうだとしたら、僕がこうして送っている結婚生活というのはいったい何なんだろう？　そしてそのような未知の相手と共に生活し、同じベッドの中で寝ている僕の人生というのはいったい何なんだろう？

それがそのときに僕の考えたことであり、その後もずっと断続的に考えつづけたことだった。そしてもっとあとになってわかったことだが、そのとき僕はまさに問題の核心に足を踏み入れていたのだ。（1部P60～61）

時間は午前二時である。傍らの久美子はもう寝ている。彼女は一日の労働を果たし、翌朝も定刻に出社しなければならない。亨がこの日「問題の核心」に「足を踏み入れ」ることができたのは、平日の午前十時半にスパゲッティをゆでていられるような、縛られている時間の制度から自由でいられる立場にあったからである。亨は失業前には法律事務所に勤務していたが、もし、仕事を辞めなかったら、深夜まで起きて妻のことを考える余裕はなかったかもしれない。謎の女から電話がかかってきた出来事性から、かかってきた時間への注視へと、初出から単行本以降の書き換えは、亨のもつ自由時間＝労働に縛られることがなく他者へと思いが寄せられる潤沢な時間、ささやかな出来事から何か大切なものを感受して、それを思考し行動へと移すことができる豊かな時間が与えられていることが、この物語の展

開では必要であることを示唆している。

Ⅱ　火曜日の女たち

では、2章の最後に置かれている「問題の核心」とは何だろう？　誰の問題なのだろうか？　物語が「問題の核心」に向かって展開し始めるのは、このときからさらに二カ月半の時間が経過してからである。亨はいまだ失業中の身で、冒頭に掲げたスパゲッティをゆでているときに謎の女から十時半に電話を受けた。それから一時間後の十一時半に、今度は久美子から電話がかかってくる。失業中の亨に若い女性向け雑誌の詩の投稿の選考と添削の仕事の紹介をするものだった。二人は亨の就職について次のような会話をする。

「いろいろと声はかけてある。そろそろ返事がくるはずだし、それが駄目だったらそのときにまた考える」
「そう？　まあそれはそれでいいわ。ところで今日は何曜日だっけ？」
「火曜日」、少し考えてから僕は言った。
「じゃあ銀行に行ってガス料金と電話料金を振り込んでおいてくれる？」（1部P16）

この会話が妙に感じられるのは、料金を振り込むのに曜日が関係あるのだろうかという疑問が湧くからである。公共料金などの支払は曜日指定ではなく、たとえば支払期限15日など、期日指定ではないだろうか。先にもあげたように、本作品が短編小説『ねじまき鳥と火曜日の女たち』を発展させたものであり、「火曜日」がキーワードになっていることはわかる。しかも、単行本は第1部と第2部が同時に発売されたが、奥付の発行日には横書きで「1994年4月12日火曜日」と、通常は記さない曜日が書き込まれていることから見ても、火曜日に対するこだわりも窺える。第1部と第2部を収めた『村上春樹全作品1990～2000④　ねじまき鳥クロニクル1』の発行日はたて書きの漢数字で二〇〇三年五月二〇日とある。奥付に曜日は記されていないが、この日は火曜日であり、やはり火曜日が意識されたも

（九七）

のであろう。ただし、文庫本発行日には火曜日へのこだわりを窺うことはできない。第3部は単行本では金曜日と記され、それ以降の発行日の曜日の統一は窺えない（注1参照）。

改めて久美子がなぜ曜日を亨に確認したのかについて考察してみよう。雑誌編集の仕事をしている久美子が、日にちや曜日に鈍感であるはずはない。むしろ失業中で家にいる亨のほうが曜日を忘れがちであろう。にもかかわらず久美子が亨にわざわざ曜日を尋ねているのは、それが「火曜日」であることを意識させたかったからだと考えられる。「火曜日」には何が潜んでいるのだろうか。

実は、初出では記されながら、単行本以降は消されてしまった「火曜日」がある。この点に着目してみよう。

第1部第3章で、亨は久美子から一週間前にいなくなった猫探しのために、一種の占い師のような加納マルタに会うように言われる。面会したコーヒールームで亨はマルタの妹の加納クレタが久美子の兄の岡田昇に「汚された」と聞かされる。以下は初出からの引用である。傍線部分は初出のみにある文章であり、単行本以降は削除されている。削除以外にも単行本以降、若干の変更部分もあるが、ここではその指摘は割愛する。

「妹は私より五つ年下です」と加納マルタは言った。「そして妹は綿谷ノボルさまに汚されました。暴力的に犯されたのです。先週の火曜日のことです」

やれやれ、と僕は思った。僕はそのまま何も言わずに席を立って帰ってしまいたかった。でもそうもいかない。僕は上着のポケットからハンカチを出した。そして口もとを拭いて、それをまた同じポケットに戻した。そして咳払いをした。

（中略）

「そのことであなたを責めているわけではありません」と加納マルタはきっぱりとした口調で言った。「もし誰かがその事に関して責められるべきものであるとしたら、まず最初に私が責められなくてはならないでしょう。私の注意が足りなかったのです。私の力が足りなかったのです。よろしいですか、オカダさま、それは起こりうることなのです。以前私自身の身にも起こりそうになったことはあります。だから私がもっと気を配っていなくてはならなかったのです。あなたもおそらく御存知のように、ここは暴力的で混

乱した世界です。ある種の人々は、その組成の中にどうしようもなく暴力的なものや獣的なものを抱えています。そして自分の中にそんなものが潜んでいるということは、ある場合には本人さえ認知されていないのです。ですから、もしあなたがだれかに対して心を開こうとすれば、あなたはそれなりのリスクというものをいやおうなく負わねばならないのです。それはある意味では避けることのできないことです。おわかりになりますか？　起こってしまったことは起こってしまったことなのです。妹はその傷から、回復するでしょうし、また回復しなければなりません。ここで私がいちばん問題にしているのは、綿谷さまの体の組成のことです」

「組成」と僕は繰り返した。どうやら彼女の話のテーマは体の組成に関することであるらしかった。僕は少しほっとしたが、話の行く先はあいかわらずわからなかった。

「妹のことはどうか気にしないでください」と加納マルタは言った。そしてテーブルの上に両手を広げて置いた。

「私たちは自立した人間です。そしてある種の訓練を受けた人間です。私はそのことで苦情を申し上げるためにオカダさまをここにお呼び出ししたわけではありません。今回の出来事に関しましては、オカダさまには何の責任もありません。私たちはオカダさまに綿谷さまが抱えておられるあるものごとについてご承知おき願いたかったのです。そして妹が綿谷さまによって汚されたのだということをご承知おき願いたかったのです。あるいはこれから先にオカダさまと私の妹とが何らかのかたちで関わることもあるかと思います。何故ならさきほども申し上げましたように、妹は私の助手のような仕事をしているからです。そういう場合に綿谷さまと妹とのあいだに何が起こったかということをオカダさまも一応知っておかれた方がよろしいかと思うのです」

それからしばらく沈黙があった。（「新潮」92年10月号、P47～48、文庫本該当部分は第1部P80～82）※傍点原文

以上のように、初出では加納クレタは「先週の火曜日」に綿谷昇から汚されていると記されている。久美子がわざわざ「火曜日」を夫婦の会話の俎上に載せたのは、クレタが昇に汚された出来事が、久美子もしくは岡田夫妻にとっても何か作用を及ぼすことを暗示したかったのかもしれない。つまり注意を向けさせる符号のようなものが「火曜日」だったのである。久美子が可愛がっていた岡田家の飼い猫であるワタヤノボルと名付けられた猫がいなくなったのもおよそ一週間前である。岡田家にとって水面下で綿谷昇をめぐる何かが大きく

（九九）

動き始めた時なのだ。

また、初出ではマルタは亨に「もしあなたがだれかに対して心を開こうとすれば、あなたはそれなりのリスクというものをいやおうなく負わねばならないのです。それはある意味では避けることのできないことです。おわかりになりますか？」と注意を促している。あたかも亨が「心を開こうとする」準備があるように窺える。さらに、初出ではマルタは綿谷昇の「抱えておられるあるものごと」に対して注意を向けることを亨に示唆し、「ここで私がいちばん問題にしているのは、綿谷さまの体の組成のことです」（単行本以降では、傍線部分が「妹の体の組成のことです」に変更されている）と、重ねて綿谷昇に注目を向けている。

「火曜日」――それは、綿谷昇と彼に汚された加納クレタや、岡田久美子もしくは岡田亨夫妻と、「暴力的で獣的な」「体の組成」を持つ綿谷昇とが引き起こす事件ともいうべき出来事の幕が開かれた時なのである。

Ⅲ　消えたトニー滝谷、井戸のある場所

初出に見られたマルタから亨に向けた警告である「もしあなたがだれかに対して心を開こうとすれば、あなたはそれなりのリスクというものをいやおうなく負わねばならないのです」という言葉は、単行本以降は削除されてしまったが、非常に興味深い言葉である。亨が心を開こうとしているならば、本論の冒頭に引用した村上の言葉に見られるように、「先行する作品とは異」なる主人公の誕生ということになろう（注4）。では、その相手とは誰なのだろうか。それが久美子だとすればどのようなリスクを負うことになるのだろうか。

この問いを解くひとつの手掛かりとして、村上春樹作品の『トニー滝谷』（注5）という短編小説を参考にあげよう。売れっ子のイラストレーターのトニー滝谷は、母親を生後三日目に喪い孤独な人生を歩んでいたが、ある日原稿を取りにきた女性と恋に落ち結婚した。愛する妻は主婦としても有能であり、トニー滝谷は孤独を忘れ幸福感に包まれていたが、唯一の問題が妻の買い物嗜癖（「中毒」）であった。妻は目の前にきれいな服があると買わずにいられなくなり、その量も金額も度を超すものとなっていた。金額の多寡はともかく、どこかで歯止めをかけなくてならないと思い、ある日思い切って、「そんなにたくさんの高価な服が必要なんだろうか」と妻に注意をする。

妻は買った洋服を戻しに行った途上で車の事故で亡くなる。トニー滝谷は長い間孤独であったが、妻との共棲生活が孤独を癒し、初めて救われた人生を送っていたのである。妻を喪ったトニー滝谷は、再び孤独へと戻るというストーリーである。

久美子の言う、彼女の可愛がっていた猫がよく姿を見せていたという、入口も出口もふさがれた路地にある宮脇邸、その向かいにある家が滝谷家であり、初出と単行本ではこの『トニー滝谷』の物語が盛り込まれているのである（注6）。メイは亨に、滝谷トニーが本名であること、克明なメカニズムのイラストレーションを専門とする人物であり、先日交通事故で奥さんを亡くし大きな家で一人で住んでいること、ほとんど家の外に出ないし、近所づきあいもないことを教える（「新潮」92年10月号P20、文庫本該当部分第1部P33～34）。

『トニー滝谷』の物語は、加納マルタがアドバイスしたように、人が心を開こうとすれば、それなりのリスクを負うのだという原則を思い起こさせる。彼は、妻が高価な洋服を次々と購入することを「必要なんだろうか」と問うことで、妻の抱えている闇（＝中毒）を有無も言わさず封印しようとした。そもそもトニー滝谷が彼女に恋をしたのは、彼女の洋服の着こなし方に心惹かれたことがきっかけであった。「まるで遠い世界へと飛び立つ鳥が特別な風をまとうように、とても自然にとても優美に服をまとっていた」（P137）のであり――この表現も『ねじまき鳥クロニクル』の宮脇邸にある鳥の石造が連想されるし、亨も久美子の着こなしに惹かれている――、洋服は彼女にとって核となるものであり、封印されてしまっては彼女の生は遮断されてしまう。たとえていえば生きながらも、「がらんどう」の人生を歩むことになるのだ。綿谷昇が加納クレタの中からなにかを引き出して、異なるものを入れたことでクレタを「汚した」とすれば、その人の持つ本来の核を他者の意向によって変えられてしまうことは、その人を決定的に損なうことを意味するだろう。

人が人に心を開き孤独から抜け出ようとするためには、「必要」という言葉では置き換えられない、その人の核を、たとえそれが余剰性や過剰性、言いかえれば逸脱した狂気的なものも含んでいようとも、注4でも述べたように、そのすべてを引き受けることになるのだということを示唆している。

久美子が亨に赴かせた路地は、のちに重要な鍵を握る宮脇家の庭にある涸れた井戸がある場所であるばかりでなく、さらに妻を「十全に理解」できなかった夫の不幸が刻印された土地だったのである。亨は久美子のすべてを受け入れることができるのだろうか。また、久美子の抱えている闇とは何なのだろうか。

（一〇一）

Ⅳ　久美子の闇

第2部6章では、亨と久美子が初めて出会い、関係を深めていった際のエピソードが語られている。二人は週に一度はデートをするようになり、亨の久美子に対する好意は深まる一方だったが、彼は久美子の言葉や動作に何かの迷いや影があることを感じとり、急いで久美子との関係を深めようとはしなかった。しばらく時を経て、亨は久美子に恋人かボーイフレンドがいるのではないかと切り出す。久美子はそれには答えずに「これからあなたのアパートに行っていい？」と訊ね、この日、久美子は亨と性関係を結ぶ。その際、亨は久美子に生じる「乖離の感覚」を見出している。

クミコにとってそれが最初の性体験だった。交わりが終わったあと長いあいだ、クミコはひとことも口をきかなかった。何度か話かけてみたのだけれど、彼女は答えなかった。（2部P110）

最初にクミコの中に入ったとき、それに似た奇妙な戸惑いを感じたことを覚えている。クミコは最初のときにはおそらく苦痛しか感じなかったはずだ。彼女は痛がったし、ずっと体をこわばらせていた。でも僕がその戸惑いのようなものを感じた理由はそれだけではなかった。そこには何か、奇妙に覚めたものがあった。うまく表現できないのだけれど、そこには一種の乖離の感覚があった。（2部P112）

亨は久美子と結婚した後も「クミコのなかに僕の入ることができない彼女だけの領域が存在していることを、僕はときおり感じないわけにはいかなかった」と受け止めており、日常生活においても久美子は熱心に会話をしている途中に急に沈黙の淵に沈みこみ、「心ここにあらず」状態に陥ることがあった。結婚三年目に久美子は妊娠した。注意深く避妊していたので、亨にとっては不意の妊娠で寝耳に水

だった。親の援助も全く受けずに若くして結婚した二人は、まだ生活が苦しく、子どもを産む余裕がなかったので、久美子は今回は諦めるしかないと言うが、亨は学生時代に付き合っていたガールフレンドを過去に堕胎させたことがあり、その苦い経験から堕胎には賛成できなかった。ゆえに避妊も注意深く行っていたのだろう。妊娠をめぐる夫婦の話し合いのなかで、二人は以下の会話をしている。

「ねえ、どうして妊娠なんかしちゃったんだと思う？　あなたには何か心当たりはある？」

僕は首を振った。「避妊に関してはいつも注意していた。失敗してあれこれ悩みたくなかったからね。だからどうしてそんなことになったのか、見当もつかないんだ」

「私が誰か別の人と浮気したとは思わない？　そういう可能性は考えない？」

「考えないね」

「どうして考えないの？」

「僕はあまり勘のいい人間とは言えないけれど、でもそれくらいのことはわかる」

（中略）

「他の誰かと浮気したの？」と僕はふと気になって、ためしに尋ねてみた。

クミコは笑って首を何度か横に振った。「まさか。そんなことするわけがないでしょう。ただ純粋に可能性の問題として持ち出してみただけよ」、それから彼女は真顔になって、テーブルの上に肘をついた。「でもね、正直に言うと、私にはときどきいろんなことがわからなくなってくるのよ。何が本当で、何が本当じゃないのか。何が実際に起こったことで、何が実際に起こったことじゃないのか。……ときどきね」

「それで今がそのときどきなの？」

「まあね……。あなたにはそういうことってない？」

僕は少し考えてみた。「ちょっと具体的には思い出せないな」と僕は言った。

（一〇三）

「なんと言えばいいのかしら、私が現実だと思っていることと、本当の現実とのあいだに、少しズレがあるのね。私の中のどこかに、何かちょっとしたものが潜んでいるような気がすることがあるの。ちょうど空き巣が家の中に入ってきて、そのまま押入れに隠れているみたいにね。そしてそれがときどき外に出てきて、私自身のいろんな順序やら論理やらを乱すの。磁気が機械を狂わせるように」（2部P123～125）※傍点は原文

以上の久美子の告白は、亨が折に触れて感じていた久美子の「乖離の感覚」を裏付けるものといえよう。結局、久美子は亨の出張中に堕胎してしまう。亨は札幌でその知らせを受けたあとに入ったスナック・バーで二十代後半の男性歌手が歌を歌い終わった後に、歌を歌うのは共感する力、「自分という狭い殻を離れ、多くの人々と痛みや喜びを共有したい」からであると言い、蠟燭の火の上に掌をあぶるパッフォーマンスを行う。その炎は彼の掌を焼き、観客の中には悲鳴を上げた者もいた。彼は、自らの肉体が焼かれるのでなく、その場面を見ているだけでも、その痛みを我がことのように感じる能力があることを指摘して立ち去る。

久美子の妊娠、堕胎は、この札幌の歌手のいう痛みを共感する力とどのような関係があるのだろうか。久美子は堕胎したことに対して傷ついており、そのための傷心旅行にも夫婦で出かけている。それでも堕胎したことに関しては「それ以外には方法はなかった」といい、自分の気持ちや感じていることを正確に口にできないことが一番つらいと亨に告げる。亨は、この堕胎した件を一九八四年七月に、宮脇邸にある古い涸れた井戸の中に入って回想しているのだが、久美子の言葉にできない思いを聞き出しておけば久美子を失わないですんだかもしれないとふと後悔しつつも、だが、言葉にすることができないということは「彼女の力を越えたことだった」と思いなおしている（2部P151～152）。「痛み」は個々人によって異なり、それを言葉にすることは非常にむずかしい。それならば、言葉を介在しないで、その人の痛みを「共感する」ことで理解すればいい。感情や感覚を鈍磨させてしまえば、ひとは言葉のみに頼らざるを得なくなる。それはまるで、仮面をかぶり、知的な言語を操る綿谷昇的世界である。

結婚以来、二人でこつこつと積み上げてきた生活の中で、たった一人で決行された久美子の堕胎は、亨のみならず久美子にとっても大きな出来事であり、それはやがて第3部で亨の口から「想像に過ぎないのだけれど」と前置きしながら「綿谷家の血筋にはある種の傾向

が遺伝的にあった。」「だからこそ君は子供を作ることに恐怖を感じていた。妊娠したときにパニックにおちいったのは、それが自分の子供の中に現われてくることが不安だったからだ」（3部P458）と語られている。この内容は亨の空想めいた想像からの所産でないことは、長年、国会議員を務めていた綿谷家の伯父に使われていて、そのまま昇に選挙地盤ごと引き継がれた牛河が、亨に語った言葉などからも裏付けられるようになっている。久美子の闇は、綿谷家にあるのだ。

V　綿谷家の闇

さて、この物語の冒頭にかかってきた謎の女（＝久美子）からの電話の声について考えてみよう。この電話の声は「ちょっとした感情の変化で声のトーンががらりとかわる」とある。寝食を共にする結婚生活を六年間過ごした夫が、妻の予想外の声のヴァリエーションを妻のものと認めることができないのは、作品世界から窺っても不思議なものとして映らない。問題は、夫が妻の声として看破できないことが自然か不自然かの判断にあるのではなく、「ちょっとした感情の変化」で電話の声が変わることに注目すべきであろう。先に述べたように久美子には「乖離の感覚」がみられる。アメリカ・カリフォルニア州で結婚・子ども家庭カウンセラーを実践しているリンダー・シラーが著した『解離する子どもたち―ちぎれた心をつなぐ治療』（郭麗月・岡田明監訳、ハリス淳子訳、明石書店、08年7月）の序文に〈感情〉をめぐる興味深い言葉がある。「激しいトラウマが長期にわたる場合、解離は逃避以上のものとなる。生き残りのため、『これは現実ではない――私の身の上に起こっていることではない』と信じなければならない場合もあるだろう。しかし、私の患者たちは、たとえ幼い子どもであっても、自分で自分に隠していることを知ろうと闘うものだということを教えてくれた。つらすぎて感じることができないと思えるようなときでさえ、私たちは感じるために闘っているのである。人間は自分自身―あるべき本当の自分―になるために闘うのである。」（P9）という言葉は、本作品を読むうえで有効なヒントを与えてくれる（引用文中の傍点は山崎）。つまり、感じることが、自分が自分でいられること、あるべき本当の自分を支える要となり、感情こそが本来の自分を取り戻す糧となるものなのである。

本作品中には他にも〈感情〉という言葉が登場する。たとえば、『ねじまき鳥クロニクル第2部』の第3章「綿谷ノボル語る、下品な

島の猿の話」では、綿谷昇が岡田亨を罵倒しつつ久美子との離婚を勧める場面で、いつもは冷静な亨が感情を露わにして反撃に出た後に、加納マルタが「感情というものは、ときには外に向かって解き放つ必要があるのです。そうしないことには、内部に流れが淀んでしまうことになります。」と述べている。内部に流れが淀めば、先に引用した言葉に従って「あるべき本当の自分」を損なう恐れが生じるだろう。また、このマルタの言葉を受けて亨が「僕はあの男と話をするたびに、おそろしく空虚な気持ちになるんです。まわりにある何もかもがみんな、実体のないものに見えてくるんです。目につくすべてががらんどうに見える。」と発言している。

この「がらんどう」の感覚に苦しめられているのは、一九三九年に生じたノモンハン事件の犠牲者として描かれている間宮中尉も同様である。亨の場合は綿谷昇と話をした時に「がらんどう」の感覚に襲われるが、間宮の場合は自分自身が「がらんどう」であることに生涯苦しんでいる。

間宮中尉は、地図作成のために国境線周辺を調査し、その調査が国家機密であるらしく、ソ連側から狙われていた山本の補佐として任務に就いた。山本は捉えられ、ロシア人の命令のもと蒙古人によって生きたまま皮を剥がれる拷問を受けることになる。拷問者は答えを導きだすために徐々に皮を剥いでいったものの、答えが得られないままも続けられ、腕の皮から始まり、頭の皮、耳や鼻、睾丸を切り取り、乳首まで付いている胴体の皮を剥ぎとり、やがて皮膚をすべて剥がし終え、山本は赤い肉のかたまりに過ぎなくなって息絶える。このような残虐な拷問の一部始終を目撃させられ、その後、自らも全裸で何も持たされず、ラマ教の石塔近くの砂漠にある涸れた井戸の中に投げ込まれるという、想像を絶する経験を経た間宮は、井戸の中で一瞬だけ射しこむ太陽の光に、「一瞬の人生の意義」を見出すが、太陽光が去ったあとには抜け殻となって、もはや何も感じない人間となってしまう。投げ込まれて三日後に井戸から救出され、手当てを受けた後に再び戦地に駆り出され左腕をなくし、シベリア抑留の辛惨な目に遭ったときでも、井戸の中で経験した「一瞬の人生の意義」が去った後では「心の底では何も感じなくなって」おり、敗戦後に帰国した後でも「本当にがらんどうになったみたい」な感覚から間宮は生涯抜け出せない。

このふたつの「がらんどう」という言葉は、「感じる」という言葉と対置され、たとえて言えば前者が死、後者が生を意味している。亨が綿谷昇と会話すると「がらんどうになる」のは、綿谷昇が「感じる」力＝感情をもたない人間であるからである。昇は他者に向かい

合う時は、仮面をかぶり、役割に徹する。先に引用した言葉を借りれば、彼はあるべき本当の自分になるために、自分自身と闘うことのない人間だということだ。

彼を生み出し育てた綿谷家の家庭環境は劣悪なものとして描かれている。彼は長男として両親から溺愛され、優秀な成績をとって一人でも多くの人間を押しのけていくことこそ、弱肉強食の階級社会のなかで生きぬく道であることを教え込まれて成長した。官僚の父親の教育方針が、エリートで生きるしかこの日本では生きていく意味がないと昇をスポイルしたと考えられる。

また、綿谷の両親は末っ子である久美子を、嫁姑関係のいざこざの緩衝材として三歳から六歳の間に新潟の父方の祖母の家に預けていたし、久美子は呼び戻された後でも嗅いだことのない親の匂いのもとで少しも心が休まらなかったと回想している。このような久美子の生い立ちをも鑑みれば、家族の中で最も力のある綿谷の両親は、子どものすべてを受け入れようとする姿勢は皆無であるといえるだろうし、子どものもつ本来の人間としての核を無視して親の思うように変えようとしていることを指摘できるだろう。昇が加納クレタに行った中身を他者のものと入れかえる行為も親から伝承されたものということも可能である。そして、3部では同様のことを久美子や久美子の姉もされていることが明らかにされる。

昇の持ついびつ性は、正面からは亨によって暴かれる。そして、たとえて言えば皮膚の下にある一見して目にすることはできない人間の核となる暗渠部分は、久美子や加納クレタによって暴かれていく。

Ⅵ　近親相姦的なまなざし

久美子がまだ亨のもとを失踪する前に、彼女の口から昇のもつ「精神的な問題」を話題に上げる箇所がある。昇が伯父の地盤を継いで国政選挙に出る話が持ち上がった際に、離婚歴があって独身であることが国会議員の候補者として問題にならないのかと亨が久美子に尋ねた後に彼女は、選挙への影響についてはわからないと答え、「でもそれはそれとして、あの人はおそらくもう二度と結婚しないわよ。誰とも。」の後に、初出誌のみ次のように続けられている。傍線部が単行本以降削除された部分である。

（一〇七）

「どうして彼が最初の結婚をしたのか私にはよくわからないけれど、いずれにせよあれは決定的な間違いだったし、あんなことやるべきじゃなかったのよ。だって、あの人が好きなのは死んだお姉さんなんだもの。死んだお姉さんがあの人にとっては全てなんだもの。あの人はこれまでにたぶん、死んだお姉さん以外の女性を好きになったことなんて一度もないと思うな」

「へえ」と僕は言った。

「それは本当のことなのよ。私の勝手な憶測とかそういうんじゃなくて」、クミコは二本の綿棒をティッシュペーパーにくるんでごみ箱に捨てた。そして顔を上げてじっと僕を見た。（第1部「新潮」93年5月号P294、文庫1部P229～230）

この後、姉の死後三年（初出誌は二年となっている）、昇が大学生の時に、亡くなった姉の服を取り出して匂いを嗅ぎながらマスターベーションをしていた場面を小学校四年生の（初出誌は三年生）久美子が目撃し、その際に昇と目が合ったというエピソードが語られる。この姉に向ける昇の偏愛は、「見てはいけない屈折した行為」「見かけよりはずっと深い行為」と当時の久美子には感じられ、文庫版では以下のように続けられている。

「彼は君のお姉さんのことが好きだったのかな？」

「どうかしら」とクミコは言った。

「でもお姉さんに性的な関心を持っていたかどうかまでは知らないけれど、そこにはきっと何かがあったし、たぶん彼はその何かを離れることができないんじゃないかという気がするの。結婚なんてするべきじゃなかったと私が言うのは、そういうことよ。」

それからクミコは長いあいだ黙っていた。僕も何も言わなかった。

「あの人はそういう意味ではかなり深刻な精神的なトラブルを抱えているのよ。もちろん私たちだって多かれ少なかれ精神的な問題を抱えてはいるわよ。でもあの人の抱えている精神的な問題は、私やあなたが抱えているものとはものが違うのよ。それはもっとず

っと深くて固いのよ。そしてあの人はそういった傷なり弱みなりを、何があっても絶対に他人の目には晒そうとしないの。私の言ってること、わかる？　今回のこの選挙のことに関しても、私にはそれがいささか心配なのよ」（文庫第1部P231）※傍点は原文

久美子は六歳で綿谷家に戻されても家庭に馴染めなかったなかで、五歳上で小学校六年生の姉が唯一、久美子の面倒を辛抱強く見て彼女の孤独を癒してくれた。この姉は綿谷家にとって「要のような存在」であり久美子が家に戻ってきた翌年に亡くなってしまってからは、久美子は「どうしてお姉さんのかわりに私が死んでしまわなかったのか」と罪悪感をもち続けていた（1部第6章）。この姉は第3部で、綿谷昇によって自殺させられたとなっている。

ただひたすら良い成績を取るために、「人生における最も多感で傷付きやすい時期」にガールフレンドを作る暇もなく、羽目をはずして遊ぶことも許されなかった昇が、屈折した感情や欲望を外に向けられず家庭内にそれらを向け、この姉に性的なまなざしを向けていたとしても不思議ではないだろう。久美子もまた、小学校四年生という初潮を迎えようとする第二次性徴期の入り口で兄の近親相姦的な欲望を目の当たりにして、先に述べた罪悪感とともに久美子のなかで苦しみは深まっていたことは想像できる。

Ⅶ　金曜日の女へ

『ねじまき鳥クロニクル』は、第1部と第2部で投げかけられた謎や問題を、第3部で解決したものもあれば、謎のまま残されているものもある。だが、本論の冒頭に引用した村上の言葉にあるように、「何があっても妻を探しだす」ことへの求心力に従って、久美子が姿を消した謎に関しては解き明かされていると考えてよいだろう。久美子が亨の前から姿を消したのは、一九八四年七月のことである。久美子が家を出たとわかった朝に、亨は飲んだコーヒーに「石鹸の味が混じっていた」（2部P15）と感じている。よく洗ったポットや問題のない水で淹れたのに、カップを変えても石鹸の匂いが消えなかったとある。一方で、久美子が離婚を望んでいると伝えにきた昇と面会した際に亨は、世間向きの仮面の下にある昇の秘密を暴くことができると啖呵を切るが、そのあとに亨は口の中が苦い臭いがして、

グラスの水で洗い流そうとしたが、臭いを取ることはできなかった。兄の昇は苦い臭い、妹の久美子は石鹸の匂い、この対応によって、亨は石鹸＝久美子の力を借りなければ昇の汚れを洗い流すことはできないことの暗示と考えられる。つまり、綿谷昇の悪を暴き浄化させるには、久美子の力がないと無理なのだ。

亨は久美子を取り戻すことを決意して、再び元・宮脇邸（＝「屋敷」）にある井戸に入る。赤坂ナツメグの仕事を引き受けて井戸に入っていたこととは別に、久美子を取り戻すために入るのである。すでにナツメグから依頼されて行っていた亨の仕事は、「週刊――」12月21日号『世田谷名物、首吊り屋敷に出入りする人々』との見出しで、記事にされたことで中断された。二週間前にも記事として出たこともあり、著名人の妻が顧客である以上、ゴシップの種が芽生えそうになった時点で、「仮縫い室」は閉鎖されなければならなかったのだ。

亨が久美子の中にある「僕のまだ知らない久美子だけの世界」に気づき、「問題の核心」に足を踏み入れることができたのは、仕事を辞めたことによる自由時間が生まれたからであることは先に述べた。いよいよ亨が久美子を取り戻そうと決意し、行動するにあたっても、亨は仕事を辞めなければならない。その足取りを以下に追っていく。特に、『ねじまき鳥クロニクル第3部』単行本奥付に記された「金曜日」という曜日に留意して読んでいこう。

まず、「仮縫い室」が閉鎖される要因となった「週刊――」12月21日号の刊行された日にちと曜日を確認したい。週刊誌は多くの場合、明記されている号数より、一～二週間前に発売される。現在はその号の二週間前に週刊誌が発売されることが多いが、一九八五年当時は一週間前が多かったように記憶している。この推測をもとにテキストを追っていくと、この号の実際の発売日は12月14日と推測できる。実際のカレンダーでは、この日は土曜である。亨はこの記事の出る前日の13日の金曜日に、いよいよ昇から久美子を取り戻そうとする行動にでているのだ。この日、亨は牛河に電話をして「今夜にでも綿谷ノボルとコンピューターを使って話ができないかな」と切り出す。牛河は、当日言われても無理だが明日の夜十時ならばいいと引き受ける。つまり、亨が実際に行動に移し始めた曜日が金曜日なのである。

週刊誌が発売された当日の朝に、シナモンはナツメグを連れて「屋敷」を訪れる。亨に「仮縫い室」の一時閉鎖の告知をするためである。この日の客の予約はすべて取り消され、亨は仕事から解放される。この14日土曜日の夜にいよいよ亨は「仮面の下にあるあなたの秘

密に着実に近づいている」と昇に挑み、久美子を返すように強く要求する。翌15日の日曜日、「屋敷」にシナモンは姿を見せず、それから亨も五日間「屋敷」に足を運ばないとある。五日目にかつて加納マルタや昇と会った品川パシフィックホテルのコーヒールームに亨はいくが（注7）、その帰り道に偶然牛河と会う。牛河はもはや昇の所にはおらず、別の雇い人に移行する準備期間中に身をおいていた。亨は彼から久美子の様子や綿谷家の闇をめぐる情報を得る。翌六日目の12月20日金曜日の朝に「屋敷」を訪れ、昼十一時ごろに井戸の底に下りる。いつも、そこに立てかけてあるバットが、この日には消えていた。このバットは、後に久美子が持ち去ったものとわかる。

やがて亨は井戸の底で入眠し、覚醒した時は「壁を抜けた」後であり、やがていつもの「泥棒かささぎ」の口笛を吹くホテルのボーイの後を追って208号室にたどりつくが、その部屋には入らずボーイがカティサークの瓶とアイスペールと二個のグラスをのせた銀のトレイをその部屋に置いて出てきた後を亨は再び追う。その先はロビーでNHKのテレビ放送が流れている。そこで衆議院議員・綿谷昇が午前十一時半に赤坂の事務所にいた時に若い男が侵入してバットで頭部を強く殴打したために、綿谷は重体であるとのニュースが流れる。年齢や背格好、そして顔の右側についている痣など、その男は亨と酷似している。ロビーにいる人間は亨が犯人のようなまなざしで見るが、亨は自分が犯人ではないし、久美子に会うために「半年間毎日井戸の底で待ち続けて」（3部P412）ようやく壁を抜けてやってきたので、捕まるわけにはいかず、その場から足早に逃げだす。テレビを見ていた人々が亨を追ってくる。亨は顔のない男に助けられながら、ようやく208号室にたどりつく。

ドアは開かれ、そこには久美子がいると亨は信じている。暗闇の中で声しか聞こえないその女性の声は、時に少女のように、時に落ち着いた知的な声にと変わり、亨はその声に向かって、謎を解くようにその声の持ち主こそ久美子であることの確証を述べていく。声の持ち主＝久美子であることの謎をとき、「君を連れて帰る」「そのためにここに来たんだ」と宣言する。その亨の言葉に久美子は、「もう考え直すことはない？」と確認し、その返事を聞いた後に、亨にバットを手渡す。改めて指摘しておきたいが、この日の曜日が金曜日なのである。

このあと、亨は井戸の底に戻り、それまで涸れていた井戸に再び水が湧き出し、危うく溺死するかのところで亨は意識を失う。シナモンによって救助された亨は二日間病床に伏せる。三日目、12月23日月曜日と推測されるその日に、自分で起き上がれるようになり、井戸

（一一一）

が埋められることの決定をきく。四日目に亨の頬から痣が消え、五日目の12月25日の夜に亨はかすかな櫂の鈴の音を聞いている。つまりクリスマスと思われるその夜に、まるでサンタクロースからの贈り物のように、シナモンの小部屋にあるコンピューターからシナモンが画面から亨を呼んでいた。そこには画面に浮かんだメッセージ、久美子からの手紙が開かれていた。

久美子は手紙の中で「もしあなたがいなかったら、私はおそらくずっと前に正気を失っていたでしょう。私は自分を完全に別の誰かに明け渡し、もう二度と回復することのかなわない場所まで落ちていたことでしょう。兄の綿谷ノボルはそれと同じことを、ずっと昔私の姉に対しておこない、そして姉は自殺しました。彼は私たちを汚したのです。」（3部P499）と、兄・昇が行ってきた姉・久美子（クレタも同様であろう）にしてきた「本当の自分」を奪う所業が記されていた。そして、「兄である綿谷ノボルを殺さなくてはならない」と決意し、これから生命維持装置のプラグを抜いてくると書かれていた。久美子は「本当の自分」とは何か未だわからないというが、それは笠原メイが実家を離れて自身の模索を試みているように自分で試行錯誤しながら見つけ出すものであろう。久美子は、これ以上自分の身体を別の誰かに明け渡したままではいられない、そのために綿谷昇を殺害することを決断したのである。

以上の流れから亨が「何があっても妻を探しだす」と一貫した意志に従って、計画を練り、実行した日が金曜日であったことが確認できよう。さらに重要なのは、井戸の底にあったバットがこの決断の日には久美子の手に渡っていたことである。久美子は亨の自分への強い意志（愛）を確認し、そのバットを亨に手渡した。昇を殴打したと報道されたテレビ報道では、犯行時間は十一時半である。この日、井戸の底に下りたのは十一時頃で、亨はバットを持っていない。この綿谷昇殴打事件の報道は、井戸から出た後に、赤坂ではなく長崎で、それも殴打によるものでなく「一種の脳溢血」で昏倒したと報道されているが、いずれにせよバットをふるったのは本人も否定しているように亨ではないと考えられる。もし、バットを振るって昇を昏倒させたものがいたとしたら、それはバットを持っている久美子であろう。

さらに、久美子は昇が脳溢血で倒れたとされる側の世界の手紙の中でも、これから昇の生命維持装置のプラグを抜きにいくとある。この日がいつなのかは、この手紙がいつ書かれたのか明確にはできないが、実行したことは3部の最終章である41章では拘留中であり裁判を待っているということになっていることからもわかるようになっている（注8）。自分を完全に別の誰かに明け渡してしまう存在へと

変えようとした兄・綿谷昇から、自分をとり戻し回復するために、自分自身――あるべき本当の自分――になるために久美子は昇と闘ったのである。そして、その決断した日が亨と208号室で会った金曜日なのであった。

おわりに

『ねじまき鳥クロニクル』は、ノモンハン事件における生きたまま人間の皮を剥ぐ恐ろしい拷問場面や、日中戦争下でのバット殴打による惨たらしい中国人処刑場面など、本論ではほとんど言及できなかった歴史的な闇もあぶり出している。ともに国境や国を侵す国家的行為によって、そこに巻き込まれた人間は、本来の自分を失くし己の身体を完全に別の誰かに明け渡してしまう存在へ変えさせられてしまう。綿谷昇の祖先は中国侵略を推し進めた軍人や政治家と繋がっている。綿谷家の教育方針にもっとも忠実に成長した昇が、魔術的力を得て、他者を作り替え、その人の人生をがらんどうにしてしまう行為を行っていた。彼はそれを糧に生きてきたともいえる。このような悪の犠牲者であり、かつ、その闇と血縁によってつながっている久美子の絶望感は計り知れない。たしかに亨の愛情がなければ彼女は負けていたかもしれない。

しかしながら、久美子はただ汚され、泣くだけの火曜日の女から、悪の息の根を止めるべく行動する金曜日の女へと確実に変わったのであった。そして、悪的な存在といえども兄の生命を断ち切る行為をしたことの責任を取るために、法的な罪を引き受ける固い決意をしている。本作品によってそれまでの村上春樹作品にみられた主人公の「かなてこ」的存在の女性表象から、自らのために積極的に問題を解決していく力を発揮し、その責任も負う自立した女性表象へと変貌を遂げた。それが金曜日の女・岡田久美子なのである。

注1　『ねじまき鳥クロニクル』は、第1部泥棒かささぎ編が「新潮」1992年10月号～1993年8月号に発表され、後に『ねじまき鳥クロニクル泥棒かささぎ編』として『ねじまき鳥クロニクル第2部予言する鳥編』（書き下ろし）とともに1994年4月12日火曜日に新潮社から刊行さ

（一一三）

れた。第3部は第10章「動物園襲撃（あるいは要領の悪い虐殺）『ねじまき鳥クロニクル』第3部〈鳥刺し男編〉より」のみを「新潮」1994年12月号に掲載し、後に『ねじまき鳥クロニクル第3部鳥刺し男編』として1995年8月25日金曜日に新潮社から刊行された。新潮文庫は全3部共に1997年10月1日に出版されたが、奥付に曜日は記されていない。後に第1部と第2部は『村上春樹全作品1990～2000④　ねじまき鳥クロニクル1』（講談社、2003年5月20日）に、第3部は『村上春樹全作品1990～2000⑤　ねじまき鳥クロニクル2』（講談社、2003年7月20日）に収録された。ともに曜日は記されていない。

なお、本論中に特に断りがない場合、本論の引用は入手しやすい文庫本によった。

注2　本文中前掲解題には以下のようにある。

小説の出だしに、以前に書いた短編小説『ねじまき鳥と火曜日の女たち』をもってくることは最初から予定していた。僕はときどきそういうことをやる。たとえば『ノルウェイの森』の最初の部分に、短編小説『蛍』が使われているように。ある種の短編は、書き上げられて発表されたあとに、僕の心の中に不思議な残り方をする。それは種子のように僕という土壌に落ちつき、地中に根をのばし、やがて小さな芽を出していく。それは長編小説に発展されることを求め、待っているのだ。僕はそういう気配を感じ取ることができる。（P553）

注3　「群像」1986年2月号掲載の創作合評（高井有一、三枝和子、三木卓）では、高井有一は電話の女と妻を同一人物とみなしている。

注4　『村上春樹全作品1990～2000⑤　ねじまき鳥クロニクル2』巻末解題によれば、『ねじまき鳥クロニクル』の第3部を書く前に、第1部・第2部の中から、余分だと思われる章を抜き取って、全く別の中編小説として誕生させた作品が『国境の南、太陽の西』（講談社、1992年10月）であり、姉妹作だと村上春樹は述べている。『国境の南、太陽の西』では、主人公・始が小学校五年生から十二歳までの間に唯一心を通わせあうことができた永遠の女性・島本さんと三十七歳の時に再会し、心惹かれていく。始はすでに妻子がいる身の上だったが、島本さんを愛し、もう二度と離れたくないと訴える。島本さんは始と離れてからは井戸の底で暮らしているようで、誰に対してもなかなか心を開けなかったという。その思いは始も同様であり、妻・有紀子と結婚するまでは同じ状態だった。島本さんは始の愛の告白に以下のように答えている。

「これはとても大事なことだから、よく聞いて。さっきも言ったように、私には中間というものが存在しないのよ。私の中には中間的なものは存在しないし、中間的なものが存在しないところには、中間もまた存在しないの。だからあなたは私を全部取るか、それとも私を取らないか、

そのどちらかしかないの。それが甚本的な原則なの。（中略）二度と私にどこにも行ってほしくないというのであれば、あなたは私を全部取らなくてはいけないの。私のことを隅から隅まで全部。私がひきずっているものや、私の抱え込んでいるものも全部。そして私もたぶんあなたの全部を取ってしまうわよ。全部よ。あなたにはそれがわかっているの？　それが何を意味しているかもわかっているの？」（P243～244）

「もしあなたがだれかに対して心を開こうとすれば、あなたはそれなりのリスクというものをいやおうなく負わねばならないのです」と、初出にのみあった加納マルタの言葉は、このように「姉妹作」に引き継がれている。『国境の南、太陽の西』でのリスクとは、妻子と別れることであり、それは取り返しのつかない大きな傷を妻子に与えることであるということを意味する。

ラストでは島本さんは黙って消え、妻・有紀子は始が島本さんに心を奪われている間に何度も自殺を考えていたといい、有紀子が何を感じて、何を思って、何をしようとしてたかということについてまったく始が考えようとしていなかったことを指摘する。常に自分のことだけを考えている始に対し、「何かを捨てたり、何かを失ったりしているのはあなただけじゃないのよ。私の言っていることはわかる？」（P290）と告げるのだ。

「誰かに対して心を開く」とは、自分の思いをその人に受け入れてもらうだけでなく、その相手のすべてを受け入れることであり、あらゆる出来事が生じていく中で、自分の生とともに相手の生も動いているものであり、自分の意思だけで動かせるものではなくなることを意味しているのではないだろうか。自己の人生を歩んでいく上で、確かにそれは大きなリスクを負うことであろう。

注5　『トニー滝谷』は三回書き直しがされている。初出は「文藝春秋」1990年6月号に掲載され、これをショート・ヴァージョンとし、『村上春樹全作品1979～1989⑧』（講談社、1991年7月）がロング・ヴァージョン、『レキシントンの幽霊』（文藝春秋、1996年11月）がロング・ヴァージョン再編集版である（『村上春樹全作品1979～1989⑧』講談社、1991年7月、付録「自作を語る」参照）。ここでの引用は再編集版による。

注6　初出（「新潮」1992年10月号）は以下のとおりである。

「猫はいつもあのあたりを通るのよ」と娘は言って、前方の芝生の切れめのあたりを指さした。「あの滝谷さんの垣根のうしろに焼却炉が見えるでしょ？　あそこのわきから出てきて、ずっと芝生をつっきって、木戸の下をくぐって、おむかいの庭に行くの。いつも同じコースよ。ねえ、滝谷さんって、有名なイラストレーターなのよ。トニー滝谷っていうの。知ってる？」

「トニー滝谷？」

娘は僕にトニー滝谷の説明をしてくれた。滝谷トニーというのが彼の本名であること。彼が非常に克明なメカニズムのイラストレーションを専門とする人物であり、先日交通事故で奥さんをなくして、一人でその大きな家に住んでいること。ほとんど家の外に出ないし、近所の誰とも付き合わないこと。

「悪い人じゃないわよ」と娘は言った。「口をきいたことはないんだけどね」（P19～20）

傍線部は初出誌と単行本（第1部P29～30）にのみある。文庫本と『村上春樹全作品1990～2000④　ねじまき鳥クロニクル1』には、傍線部分は削除されている。

なお、『ねじまき鳥と火曜日の女たち』（「新潮」1986年1月号）では、「滝谷さん」ではなく、大学の先生でよくTVに出る有名人気取りの「鈴木さん」となっていることからも、当初、『ねじまき鳥クロニクル』には『トニー滝谷』の断片が吸収されていたと考えられる。

注7　コーヒールームからの帰り道に「十二月の街は季節独特の活気に溢れ、駅前のショッピングセンターは厚着をした買い物客で込み合っていた」（3部P361）とある。この描写からも、やはり、12月中旬とみてよいであろう。買い物客は厚着をしているし、一般的に買い物客が込み合うのは賞与が出揃う中旬以降のことである。

注8　第3部の最終章では、久美子が拘留中に亨は笠原メイに会いに行っている。このときの「中国の刀のような鋭い弧をもった上限の月」は、1985年12月26日以降探っていくと、翌年1986年1月13日月曜日との推測も可能である。月齢カレンダーのウェブサイトhttp://www5a.biglobe.ne.jp/~accent/kazeno/calendar/1986m.htm参照。ラストの第3部41章では、亨は笠原メイに「月曜日の午後」に会いに行っている。火曜日の女から金曜日の女へ、ヒロインは泣くばかりの女性から解決をはかるために行動を起こす金曜日の女へと変貌を遂げた。あたかも週末の休息をとり、岡田亨と岡田久美子の新しい物語は、この月曜日から静かに始まっていくかのようである。

なお、本論文は平成20年度札幌大学研究助成制度による研究成果である。